

從橫峯橋附近仰望  
故山(兩子山)



我生家

在弘橋看的兩子川



田聖司著

漢詩集

田聖司

作品集

漢詩集 田聖司 作品集 田聖司 著

漢詩集

田 聖司 作品集

漢詩集 田 聖司作品集 目次

理不易行 (昭和五十年)	二
水声 (平成五年以降漢短歌)	三
一一即三理 (平成十六年)	四
赤心之詩 (平成十六年)	五
告籠且惱人們詩 (平成十六年)	六
偲財師賦 (平成十六年)	七
技基神理 (平成十六年)	九
讚苑之詩 (平成十六年)	一
蛇崩道 (平成十六年)	一
述懷 (平成十六年)	一三
多謝隣人之詩 (平成十六年)	一四
慚愧 (平成十六年)	一五
希湧清流 (平成十七年)	一六
憩冬亭 (平成十七年)	一七
孖川 (平成十七年)	一八

讚子風君 (平成十七年)	一九
懷旧熊毛 (平成十七年)	二
山芋 (平成十七年)	二一
淑氣 (平成十七年)	二三
福祉真 (平成十七年)	二四
天象觀 (平成十七年)	二五
高樓林 (平成十七年)	二六
義雄先生 (平成十七年)	二七
寸心 (平成十七年)	二八
来母来斗 (平成十七年)	二八
愚言 (平成十七年)	三
漂舟 (平成十七年)	三一
凡夫人 (平成十七年)	三二
真實在 (平成十七年)	三三
街空 (平成十七年)	三四

談交(平成十七年)	三六
於赤壁(平成十六年)	三七
生立(平成十七年)	三八
梅園翁(平成十七年)	三九
一病(平成十七年)	四〇
両子谷(平成十七年)	四一
医制(平成十七年)	四二
祈幸賦(平成十七年)	四三
小班為樂(平成十七年)	四四
亜沙呂撫臺(平成十七年)	四五
未存在(平成十七年)	四六
心底(平成十七年)	四七
内存在(平成十七年)	四八
秋時雨(平成十七年)	四九
久保殿山(平成十七年)	五〇

別府田家由来(平成十七年)	五一
二流(平成十七年)	五二
擬良(平成十七年)	五三
聴風居(平成十七年)	五四
聴風居其二(平成十七年)	五五
あとがき	五八

理不易行 一九七五年

千萬別侮何人也  
 都人平等而存在  
 有時自高或卑下  
 不是忘真理者哉

何人といえどもゆめ侮るなかれ  
 すべて人は平等にして存在す  
 時に自ら高ぶり或いは卑下する  
 これ真理を忘れし者にあらずや

顯現優劣和愛憎  
 本是一態中相對  
 雖人概此道理  
 欲為事真難開扉

優劣と愛憎の顯現するは  
 もとこれ一態中の相對なり  
 人はかかる道理を概ね悟るといふも  
 事なさんと欲するに真に扉開き難し

水声

河邊的處開了  
 黃菜花每水聲  
 我到的聽見水聲  
 朝陽布山腰  
 海看昇得見  
 微光裡  
 從大陸來過的  
 好大遠來過的  
 跟朋友來過的  
 這我友來過的  
 和贊吧

家族の古い写真(於熊毛)

父の叔父(吉武好孝)・父方祖父母  
 父母(左2人)・義叔母・義伯母



一 即三之理 二

四年五月三十一日

于一加一如何  
即二而且等于三  
男女相愛生孩子  
自他融合保安寧  
可說一一即三理

一に一を加ふるこれ如何  
すなはち二にして且つ三に等し  
男女相愛して孩子を生み  
自他融合して安寧を保つは  
一一即三の理といふべけん

人曰一有一度量  
雖說二有二度量  
二人敬和若相睦  
就成三人知的行  
不是殖幸福理哉

人曰く一は一度の量を有し  
二に二度の量有りと説くと雖も  
二人ににん敬和して相睦めば  
すなはち成す三人知の行  
これ幸福を殖するの理ならずや

赤心之詩

二

四年十二月十二日

在小亭常希人安

小亭にありて人の安からんことを常希

既無還栖山河夢  
一向樂世安寧來  
不見所流汲余意

すでに無し還栖山河の夢  
ひたぶるに世の安寧をねがい来るも  
わが意を汲みて流るところを見ず

少無与力取先韻  
性本頑而好凡庸  
只有聽風踏草時  
何所嘆此五十年

若きより力に与し先を取るの韻べ無く  
性はもと頑なにして凡庸を好む  
風を聴き草を踏むの時さえあらば  
何の嘆くところぞこの五十年

故村在老母長兄  
耕小田種苴守家  
嗚呼懷念哉孿溪

故村に老い母と長兄とあり  
小田を耕し苴をうえて家を守る  
ああ懐かしきかな孿溪(岡子谷)は

告籠且惱人們詩

二

四年十一月二十二日

我恐知見密恋人  
其心越過日越大  
徐不好獨步人間  
倦人厭世苦十年

我密かに人恋ふるを知られんかと恐る  
その心は日を過ぐるに大いにして  
徐にじんかんを独り歩むさえ好まず  
人を倦み世を厭い十年苦しむ

有時一念欲外界  
解放我執避現己  
籠己懶費其一生  
如是棄与見未来

時有り一念して外界を欲り  
我執し現を避くる己を解き放たんとす  
己に籠りその一生を懶費するは  
これ与えらるる未来を棄つるが如しと

即開始作詩為武  
是所以和朋共生  
自知共在实有趣  
存在都有善意味

すなわち詩を作り武を始めしは  
これ朋と共に生きんとせし所以なり  
自ずから知る共に在るは実に面白く  
存在すべて善なる意味を有すると

偲財師賦

二

四年聖夜作

孖山山麓得余生  
尊来財豐弘老師  
同鄉人而教余多  
即是語算仁勇法

孖山山麓にわが生を得  
財豐弘先生を尊び来る  
同郷の人に於てわれに多くを教う  
すなわち語、算、仁、勇の法なり

和師過日菜花谷  
同仰六郷美麗嶺  
追慕梅園師也同  
正深積師弟之情

先生と菜花の谷に日を過ぐし  
とも仰ぐ六郷美麗の嶺  
梅園先生を追慕するも同じうし  
まさに深積す師弟の情

卒業時有師一唱  
韓伝阿里蘭峠唄  
長年想起其哀韻  
心底育来和平夢

業卒うるの時師の一唱あり  
韓に伝わる阿里蘭峠の唄  
長年その哀韻を想い起こし  
心底に育み来る和平の夢

四十年來相交談  
遇別離二月尽日

四十年來相交談し  
別離に遇うは二月尽くの日  
恩に報いその遺徳を刻さんとして  
これを阿里蘭忌と称さんとぞ定む

報恩刻其遺徳而  
定称是阿里蘭忌

これを報いその遺徳を刻さんとして  
これを阿里蘭忌と称さんとぞ定む

技基神理

二

四年歳晩

苑有一人特秀倫  
日每無償施介護  
無欠一日也温情  
只管行所尽人耳

苑にとりわけ倫に秀でし一人あり  
日毎に無償にして介護を施す  
一日だに温情を欠かすなく  
ひたすら人に尽くす所を行うのみ

聽說子生於五島  
有縁来到此鶴崎  
和顔而且保愛語  
清心正是如蒼海

言うを聴く子は五島において生れしと  
縁ありてこの鶴崎へと来る  
和顔にして且つ愛語を保ち  
清心はまさにこれ蒼海の如し

予常敬斯慈人神  
自亦欲為福祉者  
学子是棄私尽他  
即順技基神之理

われは常かかると慈しむの心を敬い  
自らも亦福祉の者とならんと欲す  
子に学ぶ私を棄て他に尽くすは  
すなわち順う技基神の理

讚苑之詩

二 四年歳晩

壬午年来苑  
予得第二生  
朋都快活而  
慰癒過日憂

壬午の年に苑に來り  
わが得第二の生を  
朋はみな快活にして  
過日の憂いを慰め癒す

之集数多客  
談且努為健  
家人多次來  
相通親子情

ここにあまたの客集い  
談じ且つ健かならんと努む  
家人はしばしば來り  
相通わす親子の情

親哉乙津川  
葦秀伸青青  
水声宛人囁  
誤予在故郷

親しきかな乙津川  
葦の秀は青々と伸び  
水声はさながら人囁く  
われを故郷に在りと誤らす

蛇崩道

二

四年歳晩

目黒邊在蛇崩道  
四季沿道開百花  
嘗一歌聖親往來  
詠歌不下一千首

目黒のほとりに蛇崩道あり  
四季道に沿い百花ひらく  
嘗て一歌聖は親しく往來し  
詠歌は一千首を下らず

子曰歌是写生行  
而看花同一觀自  
仰樹梢或聽風声  
本是探己自然内

子曰く歌は写生の行にして  
花を見るは自らを觀ずるにおなじく  
樹梢を仰ぎ或いは風声を聴くは  
もとこれ自然の内に己を探すなると

子に深く慕える中原の人あり  
故事を尋ねて海南島に渡る  
おもえらく斯く故き詩人を偲びしは  
まさに形神の理に意を同じうせしによるべけん

述懐

二

四年歳晩作

麦風仄満辺  
山緑且笑予  
駢巡小草上  
有時仰片雲

麦風は仄かに辺りに満ち  
山緑にして且つわれに笑む  
駢けめぐる小草の上  
時にちぎれ雲を仰ぐ時あり

母暫止農手  
看予顔微笑  
父坐畦抽煙  
正是至福時

母はしばし農手を止め  
われを見て微笑む  
父は畦に坐りて煙草を吸い  
まさにこれ至福の時

為五十余歳  
顧有幾多惨  
可都是相對  
而生概斯愉

五十余歳となり  
顧みれば幾多の惨あり  
しかして生は概ねかく愉し

多謝隣人之詩

二 四年歳晚

冬麗光芒遍下来  
乙津川面水波耀  
此苑每日多人集  
唱時踊而継歴史

冬麗の光芒は遍くそそぎ来て  
乙津の川面に水波かがよう  
この苑に毎日多くの人が集い  
唱い時に踊りて歴史を継ぐ

親哉川辺的隣人  
対誰也寛容相見  
快応談以展胸襟  
多謝对予常給情

親しきかなや川のべの隣人は  
誰に对するとも寛容にして相まみえ  
快く談に応じ以て胸襟をひらく  
われに常情を給わるを多謝せん

慚愧

二 四年十二月

長春市在友好楼  
而住数位老養母  
拾兒憩地育成了  
祖国回去而不歸

長春市に友好楼あり  
而して数名の老養母住む  
兒を拾いて憩るに育てしに  
祖国へ歸りゆきて歸らず

慚愧一次抱疑念  
自心垂頭其愛耳  
諸姉興予不揺心  
要念本是一地脈

一たび疑念を抱きしに慚愧のみ  
心よりその愛に頭を垂るのみ  
諸姉われにとこれ一心を興し  
思わしむもこれ一地脈なるを

希湧清流

二 五年歳旦

有文及武予恃文  
然情徐整不至争  
看拙又巧就取拙  
故有以巧屡欺他

文及び武をもてればわれは文に恃む  
しかるに情徐に整い争に至らず  
拙又は巧を見ればすなわち拙を取る  
巧を以てしばしば他を欺くあればなり

嘗説悪貨凌良貨  
是著価源梅園翁  
予希斯流自息而  
世上清流湧出来

嘗て悪貨は良貨を凌ぐと言ひしは  
これ価源を著しし梅園翁  
われは願うかかる流自ずからやみて  
世に清流の湧き出で来らんことを

憩冬亭

二

五年一月四日

模瀨祭書屋営亭  
栖深積福祉之思  
有来者共談且酌  
味知偶得生之歡

瀨祭書屋を模して亭を営み  
住みつきて深く積む福祉の思  
来者あればともに談じかつ酌み  
味わい知る偶々生を得たるの歡

聴屋出入文墨士  
主齡三十而成業  
嗚呼生存談交間  
此情越深越慕友

聴く屋には文墨の士出入りし  
主は齡三十にして業を成せりと  
嗚呼生は談交の間に存せりし  
この情深まるほどに友慕わし

子川(岡子川)

二

五年大寒前

子川本來是清流  
昔歟和赤刺鯰棲  
今時稀見是鯢耳  
從葦生去没看他

子川はもとこれ清流にして  
昔かじかとかざと棲めり  
今時稀に見ゆるは鯢のみにして  
葦生ひゆきてより他を見かけず

梅園翁敢呼子溪  
慈此川並山為源  
長觀入万物變移  
終悟反觀条理法

梅園翁は敢えて子溪と呼び  
慈しむこの川並びに源たる山を  
ながく万物の變移に觀入せられ  
ついに悟る反觀条理の法

讚子風君

二

五年大寒日

君清廉而也丈高  
和顔可修金剛禪  
与君從旧談且酌  
親過二十有余歲

君は清廉しかも丈高く  
和顔なるも金剛禪をおさむ  
君と旧きより談じ且つ酌み  
親しく過ぐす二十有余歲

聞君得竹笛之神  
然尊其声似通風  
心笛相和為一時  
以為君遊無意境

聞く君竹笛の神を得て  
然るにその音風通うに似るを尊ぶと  
心と笛相和して一なる時  
おもえらく君無意の境に遊べるならん

懐旧熊毛

二

五年一月十日

父家嘗在熊毛村  
今廢不住連形也  
夏來下到海邊遊  
攀大石而捕熊蟬

父家は嘗て熊毛村にありしが  
今は廢れて形さえとどめず  
夏來れば海邊に下りて遊び  
大石によじ登りて熊蟬を捕えり

裏山拓有蜜柑畠  
秋生多果似黃雲  
茅屋正積如黃金  
仄照余來當為道

裏山に蜜柑の畠拓かれあり  
秋果のあまた生れるは黃雲に似る  
茅屋に正に黃金の如きを積み  
仄かにわれに照らす當為の道

宮有一基奉仕碑  
刻大人成文學事  
血脈導余詩文境  
激志作歌而写生

宮に一基の奉仕の碑ありて  
刻す大人文學を成したるの事  
血脈はわれを詩文の境にみちびき  
作歌し生を写さんと志を激らしむ

山芋

二

五年一月十日

好山芋汁不尋常  
馭巡六郷四方嶺  
特親入久保殿山  
三十余年遊櫟林

山芋の汁を好むこと尋常ならず  
馭け巡れり六郷四方の嶺  
とりわけ久保殿山に親しく入り  
三十余年櫟林に遊ぶ

芋可加醬油和水  
 外有乾魚味更好  
 通口喉中滿土香  
 正似聽見樹梢風  
 有芋汁耳不要何  
 独欣現今斯有生  
 汁中含無尽山精  
 一椀則甦至上幸  
 芋には醬油と水を加うるべく  
 ほかに乾魚の味あらば更によし  
 通れば口喉中に土の香り満ち  
 まさに樹梢の風の聞こゆるに似る  
 芋の汁のみあらば何も要らず  
 独り喜ぶ今かくして生きてあるを  
 汁中に無尽の山精を含めば  
 一椀すなわち至上の幸を甦らしむ

淑氣

二

五年一月十一日

田中師範賜余一服茶

新光差苑来  
 四方極淑氣  
 吟風一樣松  
 量是皮膜間  
 新しき光は苑にさし来り  
 よもに淑氣きわまる  
 吟風は松に一樣なりとは  
 おしはかるこれ皮膜の間なりと

主点而客服  
 主客就是  
 風声和松籟  
 何不道一樣  
 主(茶を)点じ客は服し  
 主客はすなわち一なり  
 風音と松籟とを  
 何一樣と言わざらん

福祉真 二 五年一月二十三日

聽福祉開因受容  
而起共感生信賴  
蓋此理說是慈他  
為自他不二之意

聽く福祉は受容により開き  
而して共感起ち信賴を生ずと  
蓋し此の理いうらくは他を慈しみて  
自他不二となるの意ならん

予念人乍生善而  
雖積歲当価不變  
能遇侮弱与強衆  
不是最蔑見態哉

われは思ふ人は生れ乍ら善にして  
歳積むといえどもまさに価変わらずと  
よく弱を侮り強にくみする衆に遇うは  
最も蔑さるるの態ならずや

天象觀 二 三年十月四日

天象組成物就是一而且有二相、說是速体和遲体。速体一  
面分散一面消耗動因力、變成遲体。遲体一面収束一面漸漸  
地成個球体、更加為速体収束力。斯而球体内部加有動因力  
形成熱流体、即对外部放發速体粒。這速体粒就是有二相即  
是波動性和粒動性。放發的動因力是球体内部的熱流体過剩  
力。引力不是引力就是速体變成遲体過渡的収束力。斥力不  
是斥力就是多個球体間的放發力相互衝突力。斯而天象万有  
流動。天象裡無時分、無日月、無年紀、即是只有永遠的流動。

高楼林

二

五年二月十七日

一順敬和理  
望万人幸福  
肯少欲知足  
密栖高楼林

一に敬和の理に順い  
万人の幸福を望む  
少欲知足をうべない  
密かに栖む高楼の林に

陽光觀吾象  
夜陰充吾休  
歩向所心赴  
何不至赤心

陽光はわれにかたちを觀しめ  
夜陰はわが休らいを充たす  
心おもむく所に向かい歩めば  
何ぞ赤心に至らざらん

義雄先生

二

五年二月十七日

士甚篤于情  
說様宛道化  
救予生三次  
以来共酌酒

士ははなはだ情に篤く  
話し様はさながら道化  
わが生を三たび救い  
以来ともに酒を酌む

嘗同学賢師  
繙医制即改  
有賜零余子  
必蔓亭鉄垣

嘗てともに賢師に学び  
医制をひもとき即ち改む  
賜りたるむかごは  
必ずや亭のかながきに蔓延らん

寸心 二 五年三月二日

有者不知諸邨弊 諸邨の弊を知らざる者あり  
向机練策関政事 机に向かい政事に関する策を練る  
若看此様且慮己 もしこの様を見かつ己を慮れば  
虚心何不沿民意 虚心何ぞ民意に沿わざらん

来母来斗 二 五年四月七日

銀座在酒店予好 銀座にわれの好む酒店あり  
其名云来母来斗 その名を来母来斗という  
嘗多次来催酒宴 嘗てしばしば来り酒宴を催し  
唱歌親語多国 人を親しく語らう

女将是位宮崎生 女将は宮崎生まれの方にして  
伴人道夫温旧交 伴人道夫と旧交を温たむ  
近隣在老舗卯波 近く隣りて老舗の卯波あれば  
好知伴聖真砂女 よく知る伴聖の真砂女を

副店主是旧鼓手 副店主はふるく鼓手にて  
有属青三角定規 青き三角定規に属せり  
為人甚穩且深情 人と成りは甚だ穩やかにして且つ情深

愚言

二

五年四月十四日

世異以來六十年  
没意就捨哉良邨  
余初老未馴彩灯  
而今何在桃李郷

世異なりて以來六十年  
没意すなわち捨てたるかな良邨を  
われ初老にして未だ彩灯に馴ま  
ず而今いづくに在りや桃李の郷

以為国不悟過而  
翻至離所得懷持  
彼此正似鷄迷惑  
凡夫何有事得扶

おもえらく国過ちを悟らずして  
翻つて懷持すべきを離つに至りけん  
彼此まさに鷄の逃げ惑うに似るも  
凡夫何の扶け得べき事あらん

漂舟

二

五年四月二十三日

有者不聽衆生声  
心冷如灰言不響  
雖既無友其周困  
未悟既作独狐久

衆生の声を聴かぬ者あり  
心は灰の如くに冷めて言は響かず  
既にその周困に友無しといえども  
未だ悟らず既に独狐となりて久しきを

託此者一舟之舵  
就作命運揺幾様  
舟本是物民衆貸  
不告往路惑其心

かかる者に一舟の舵を託するは  
すなわち命運を幾様にか揺るがさん  
舟はもと民衆の貸したる物なるに  
往路を告げずその心を惑わしむ

凡夫人 二 五年五月十六日

一念欲為凡夫人	一念して凡夫人にならんと欲し
毎時尋求昔日思	時ごとに昔日の思を尋ね求む
於談無碍作童子	談ずるに無碍にて童子となり
於遊離華入山峽	遊ぶに於いてや華を離れ山峽に入る
嗚呼嘗渡策謀海	ああ嘗て策謀の海を渡り
穢徒看過多日子	穢れて徒にあまたの日を見過ごせり
出世時夢垂稻穗	世にいでし時垂る稲穂を夢みしが
人間每争忘浄眼	じんかん争うごとに浄眼を忘る

眞実在 二 五年六月五日

此界有主客二態	此の界に主客の二態あり
各態相互限定他	おのおの態はあい互みに他を限定す
主觀入客即滅主	主は客に觀入してすなわち主たるを滅
し	
客常導主爾覺醒	客は常に主を覺醒に導く
其理須道二即一	その理はすべからく二即一といふべく
当然可當眞実在	まさに眞実在に當ててしかるべし
有客象才令主立	客象ありてこそ主をして立たしめ

街空

二

五年六月三十日

断電音独憩於亭  
遠遠聽見川風声  
不識蛙声生何処  
只有街空和感懷

電音を断ちてひとり亭に憩えば  
遠どおにきこゆる川風の生るかを  
知らず蛙声のいずこに生るかを  
ただ街空と感懷とあり

多友現来且馳去  
同房在可住幻耳  
只方行人迷路上  
幾何好住喫朝霧  
し

友現来りかつ馳せゆきて  
同じき房あるも幻をとどむるのみ  
ただ路上に迷う行人にくらぶれば  
いくばくか朝霧を喫いてとどまるが好

談交 二 五年七月二十四日

亭鉄垣延山芋蔓 亭のながき山芋の蔓をはびこらしめ  
主人酌酒思世情 主人は酒を酌み世情を思う  
為保生業惑塵物 生業を保たんがため塵物に惑えれば  
就過疎遠林間談 すなわち林間の談に疎遠に過ぐす

請問賢師近時怎 請いて問う賢先生はこの頃いか  
惜長没聴彼毒舌 惜しむらく長くかの毒舌を聴かず  
日往月来同積齡 日往月来ともによわいを積み  
漸識該敬同懷客 漸く知るまさに同懷の客を敬うべしと

於赤壁 二 四年わが短歌を漢訳

古里両子・両子山



一基礎 成壁来 到  
赤壁 夜 照  
尊仰 此 照  
没彼 此 照

生立

二

五年七月二十五日

生於川辺而駢野  
為田畑遊同風  
齡十五離我山河  
知所有憂世上内

川のべに生れて野を駢け  
田畑を庭となし風とともに遊ぶ  
よわい十五にしてわが山河を離れ  
知る世上の内には憂いあるを

書譜独慰日日心  
心常追無何有夢  
嗟余本是百姓子  
斯而沒有涉世術

譜を書きひとり日日の心を慰め  
心はつね無何有の夢を追う  
ああわれはもと百姓子  
かくして世渡りの術をもたず

梅園翁

二

五年七月二十八日

如対粒子電気及  
東西来方心遍沁  
心覆宇宙一切物  
不是物心一理哉

粒子に對いて電気及ぶが如く  
物来る方に心あまねく沁むる  
心宇宙一切物を覆うは  
これ物心一切の理ならずや

梅園翁生子山麓  
自少觀入自然妙  
多相問大疑団  
終極反觀合一法

梅園翁は子山の麓に生まれ  
若きより自然の妙に觀入す  
久しく大疑団に相問し  
ついにきわめり反觀合一の法

一病就說自閉症  
態是不知作連係  
拘一而好順並物  
生来不巧為会话

一病すなわち自閉症という  
態は連係をなすを知らず  
一に拘り而して順に物を並ぶるを好む  
生来会いて話すをなすに巧からず

世人大方不関他  
然当不識這樣慘  
今余自悟己無垢児  
以為捧力無垢児

世人はおおかた他に関わらず  
然るにまさにかよの惨を知らず  
いまわれは自らおのれの無知を悟り  
もって無垢の児に力を捧げんとす

聽說這病没苦耳  
傾愛即復生得力

言うを聴くこの病苦のみにあらず  
傾愛はすなわち生得力を復すると

一病即是一天恵  
須同感得愛是何

一病はすなわち一天恵にして  
ともに愛の何たるかを感じすべけん

両子谷

二

五年九月十五日

生両子谷弘聚落  
育捕鮠或掘山芋  
常仰天送片雲去  
自悟万象則不留

両子谷弘聚落到生れ  
鮠を捕り或は山芋を掘りて育つ  
常天を仰ぎ片雲のゆくを送り  
自ずから悟る万象則ち留まらざるを

心底有久保殿山  
今也宛鳴樹梢風

心底に久保殿山あり  
いまもさながら鳴る樹梢の風

出故郷過四十年  
歲月實為諸事幻

故郷を出でて四十年過ぐるに  
歲月は實に諸事を幻となす

医制

二

五年十月十日

県有十区医療圏  
而期整病床所要  
欠域内見許設院  
当剩域即不見認

県に十区の医療圏あり  
而して所要の病床を整うるを期す  
欠域内は院を設くるを許されず  
剩域に当たれば即ち認められず  
一床月に幾百万を得れば  
嘗て先を争い多床を受けんと図る  
現今質を言い量をたつとばざるに  
医質無くんば即ち栄えず

祈幸賦

(遊び心にて)

二

五年十月十三日

依必世天委葉至  
越愛情計留夢奴  
往百苦而寸体愉  
武双何歪絶唱賦  
只管心祈多幸来

著者 - 事務室にて



小班為樂

二 五年十月二十二日  
大分豊寿苑ユニットケアを運営す

苑用小班介護則  
二人一班為支援  
施情即是無用計  
協働而同得幸福

苑小班介護則を用い  
二人一班にて支援をなす  
施情は即ち無用の計にして  
協働してともに幸福を得

苑常活潑潑地嘗  
老者各班有自趣  
人生後半何不樂  
想都諾即現浄土

苑常に活潑潑地に嘗み  
老者各班自ら面白きをもつ  
人生後半なんぞ楽しからざらん  
全てを諾と想えば即ち浄土を現す

亜沙呂撫靈

二 五年十月二十二日  
名犬ロブ本年十月十二日に死去、その忠孝を讃う

命名亜沙呂撫靈  
忠犬可他日永眠  
貌茫洋常順家人  
十有余年護此家

命名す亜沙呂撫のみ靈と  
忠犬なりしが他日永眠す  
顔茫洋にして常家人に順い  
十有余年この家を護る

長子其歳十之時  
給幼犬授名呂撫  
長子長女共他育  
漸漸地修慈愛心

長子その歳十の時  
幼犬に名呂撫を授く  
長子と長女それと共に育ち  
漸漸地に慈愛の心を修む

未存在 二 五年十一月二日

於余常有未存在  
而心向不知前方  
須念只是不為己  
以尽世人就為幸  
われに常未存在ありて  
而して心不知なる前方を向く  
須くおもは只これ己の為ならず  
世人に尽くすを以て即ち幸となすべけん

未存在醒内当為  
誘引役歩福祉道  
若没発意辞貧租  
恐余没遇天賦職  
未存在は内に當為を醒まし  
誘引して福祉の道を歩ましむ  
もし発意して貧租を辞めざりしかば  
恐らくはわれ天賦の職に遇わざりけん

心底 二 五年十一月四日

謂人有称心底  
於此物心互融合  
物外来又心内包  
而主客無別境  
おもえらく人に心底と称するあり  
ここに物心互いに融合す  
物外来しまた心内包し  
而して主客無別の境を生ず

境是雖没有具体  
摇命常為其活態  
時空善美蔵此内  
即知万象使人生  
境はこれ具体を有さずといえども  
命を揺らしめ常それを活態となす  
時空善美をこの内に蔵すれば  
即ち知る万象人を生かしむるを

内存在 二 五年十一月五日

屢念己約是何者  
於此己然問正在  
言己和他成世界  
則己存在其内部  
しばしば思う己はつまり何者ぞと  
ここにしか問う己まさには在り  
言わく己と他世界を成せば  
即ち己はその内部に存在すと

更念即世界是何  
総体含己他是然  
所念裡己蔵総体  
翻而世界生蔵者  
更におもう即ち世界は何と  
己と他と含む総体がこれ然らん  
おもえる所に己は総体を蔵し  
翻って世界は蔵する者を生かさん

秋時雨 二 五年十一月五日

秋時雨音不絶下  
使余思入遠昔日  
馭野浸川消著時  
茫茫在桃源之郷  
秋の時雨は音絶えず降り  
われを遠き昔日に思い入らしむ  
野を馭け川に浸り時を消しつつ  
茫茫として桃源の郷ありき

十有来尋意所余存  
以索正似時雨音  
不絶費時至初老  
十有来尋意所余存  
以索はまさ存する所の意を尋ぬ  
思来はまさ存する所の意を尋ぬ  
不絶費時至初老に似て

久保殿山 二

五年十一月七日

此山は産祖父購  
家人以之成家誇  
屢上此而遊且親  
又支生計依培茸

この山は祖父の購いし産にして  
家人これを以って家の誇りとなす  
しばしばここに上りて遊び且つ親しみ  
また茸を培うにより生計を支う

近峠立本山梨木  
丈高恵与大多実  
幾次上来掘山芋  
土香風声満無辺

峠近くは山梨の木立ち  
丈高く多くの実を恵み与う  
幾たびも上り来りて山芋を掘り  
土香風声無辺に満てり

別府田家由来

二 五年十一月七日

離両子田家継脈  
興而築別府田家  
本是遡鎌足大人  
向不比等房前下

両子田家より脈を継ぎ  
興して別府田家を築く  
もとこれ鎌足大人に遡り  
不比等房前へと下る

和広家相契家成  
以梶葉作田家紋  
迪広家至赤穂士  
伝大野家は先祖

広家とあい契り家成り  
梶の葉を以って田家の紋となす  
広家を迪れば赤穂の士に至り  
大野家を先祖と伝う

注 「田家」は田辺家を、「広家」は広岡家をいう。また、大野家は討入りに反対して赤穂浪士団を脱退した家老、大野九郎兵衛に由来。物語化された裏面にある平和主義を信ずる。

二流 二 五年十一月十九日

身有向上下二流 身に上下に向かう二流あり  
而成作為及順委 而してなす作為および順委とを  
一欲時氣活着上 一たび欲するの時に氣活にて上り  
無欲時委元氣下 欲する無き時元氣に委ねて下る

作為則粒揺着燃 作為は則ち粒揺れつつ燃え  
順委則波穩着流 順委は則ち波穩やかにして流る  
謂二流是意或不 おもえらく二流はこれ意或は不  
等于持續的上下 持續の上下に等しきと

擬良 二 五年十一月二十八日

求利輕衆世上常 求利輕衆は世上の常にして  
而人貨徐成粗漏 而して人貨徐に粗漏なるをなす  
慮何故生這様象 何故か様の象を生むかを慮るに  
則依惡易欺良性 則ち惡易欺良の性によるべけん

一次擬良為利己 一たび己を利さんと良を擬えれば  
忽然失汗血之義 忽然と失う汗血の義を  
一行更招多行粉 一行は更に粉らさん多行を招き  
終乖正思正道理 ついには乖る正思正道の理

聴風居 二 五年十一月三十日

詩友自遠方來而  
宿此庵名聽風居  
共無飽酌酒忘時  
風聲常聽見不止

詩友遠方より來りて  
この庵に宿り聽風居と名づく  
ともに飽くなく酒を酌み時を忘れ  
風聲は常きこえやまざり

友給余詠一首詩  
就讚風聲潮音誦  
同門同學友和余  
念記此夜幾久時

友はわれに一首の詩を詠み  
風聲潮音を讚えて誦す  
この夜を幾久しく心にとどめん

聴風居其二 二 五年十一月三十日

居屢招文人墨客  
每次親談且酌酒  
時踊時笛又語詩  
共知歡喜自即他

居にしはしば文人墨客を招き  
毎に踊りたしく談じ且つ酒を酌む  
ともに歡喜の自即他なるを知る  
とも

作詩作樂即余好  
而起興取器唱詩  
韓人伊人也時來  
居即似無何有鄉

作詩作樂はわが好みにて  
而して興起これば器を取り詩を唱う  
韓人伊人も時に來り  
居は即ち似る無何有の郷

あとがき

本集は漢詩集として私が初めてまとめたものであり、一九七五年からの作五十篇を収めた。

なぜ漢詩を作ろうと思ったかといつと、大学で中国語を第二外国語として学んだ関係で漠然とその願望をもちつづけていたといつことがある。また、故郷の偉人として尊敬している、享保時代の哲学者、三浦梅園先生が多くの漢詩を作っており、それを見て以前から憧れていたことも少なからぬ。

作った作品は、色紙に墨で書き、それに故郷の面子山の絵を添えるなどして楽しんでいく。

漢詩を作り始めて思ったことは、一見固い感じのする漢詩も、うまくいくと極やかな情景も出せるし、何より、自分の思いを曖昧でないがためにまごめられるのが、その良さではないかと思う。

今回、当面の目標としてきた五十篇に一応到達したのであるが、またその気になったら作ってみたいとも思っている。

本集は、私の心に常に何かを呼び起こしてくれる故郷面子の自然と長年親しく思っている中国の友人たち、また口頃から私に勇気を与えてくれる私の家族に感謝の意を表し、その証として捧げたい。

【著者略歴】

田 聖司(でんせいし、本名:田邊誓司)

略年譜

- 1952年 大分県東国東郡西武蔵村大字両子1910番地  
(現国東市)に生れる。  
1975年 長崎県立国際経済大学を卒業、大分県に27年  
余在籍し、うち医療行政に9年携わる。  
1992年 大分県医務課医務係長を3年務める。  
1995年 東京事務所企画主管課長を3年務める。  
1998年 医務薬事課地域医療主幹を1年、翌年医務主幹  
を1年務め、介護保険制度の導入に医療計画策定  
と療養型病床群整備目標の設定により直接携わる。  
2000年 農政企画課課長補佐を2年務める。  
2002年 医療法人敬和会介護企画部長(大分豊寿苑事務  
長)を約5年務め、この間、社団法人大分県介護老  
人保健施設協会事務部会副部会長を1期務める。  
2007年 行政書士田邊法務事務所を開業、現在に至る。

漢詩集 田 聖司作品集

平成22年10月1日発行予定

著 者 田 聖 司

発行者 アンテクス

発行所 アンテクス

〒192-0907 八王子市長沼町178-42

電磁作 アンテクス

非売品

アンテクス出版理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は生産より消費へ、不易より流行への歩を速めてまいりました。そして時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや、物的価値尺度が社会に遍く浸透してお

ります。一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動等であります。こうしたなか私たちはここに、ヒューマニズムあふれる社会の構築を理想にFORU企画を興し、地方にあって文芸や哲学等々に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげようとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

一九九九年十月聴風舎理念を二一年三月継承